

i-Link

一二月、国会議員らが総選挙で戦いの冬を迎える中、大阪では野宿者が生死をかけた闘いの冬を迎えていた。大阪・釜ヶ崎。行政からはあいりん地区と呼ばれる、地図にない街。結核罹患率は世界的にも最悪といわれ、越冬期には凍死・路上死が相次ぐ街。日雇い労働者や生活保護受給者が多く、貧困や格差の影響が顕著に見られる「日本の縮図」だ。そんな悪いイメージが蔓延るこの街で先日、新たな取り組みが始まった。

この街で誰でも学ぶことができる大学を「NPO法人「いえとことばとこころの部屋（ココルーム）」が主催する「釜ヶ崎芸術大学」だ。参加資格はなし。参加費は無料。授業内容は哲学や宗教、天文学といった座学から詩や書道といったワークショップ形式まで様々だ。好きな時間に好きな科目を受講する。言い換えるならば「青空大学」だ。

先日筆者もこの大学に「入学」した。それと同時に学生証が配られた。裏には授業に来ると押してもらえらるスランプ欄があり、最後まで溜めるといいことがあるそうだ。早速筆者は宗教学の講義を聴講した。

講義はユダヤ教やイスラム教のしきたりから、仏教の具体的思想まで幅広く扱っていた。多様な人がいて、多様な思想があり、ストレートにぶつけ合う。そんな街で他を理解することの大切さを、大学教授であり住職である講師の釈徹宗氏が説いていた。

この講義には約二〇名の受講者が参加していたが、講義を聞く眼差しは皆真剣そのものであり、感想には「有意義だった」「また機会を設けてほしい」との声が寄せられた。

今号は貧困をテーマにした記事が多いが、生活の貧困だけでなく、このようなところの貧困をなくす取り組みも釜ヶ崎や日本に求められているのではないか。